

みんなの「なんな一の?」を伝えるこども記者のための新聞(毎月10発行)



# 信毎こども記者ニュース

こども記者クラブ(信濃毎日新聞地域活動部) 〒380-8546 長野市南泉町657  
TEL 026-236-3110 FAX 026-236-3193 電子メール t-chiiki@shinmai.co.jp

no.52

## 竹は日本の文化

「身の回りにある、竹でできたものを挙げてください」と聞かれたら、みんなはいくつ思いうかぶかな?取材教室「竹ってこんなにも面白い!」を9月16日、長野市の小出竹材店で開きました。竹の仕事を続けて60年という、同店の小出九六生さん(79)と、長男で同店代表の文生さん(53)を講師に、竹のあつかい方を学び、作業場を見学。竹の仕事に情熱を傾ける職人の技にふれました。

### 竜野愛子記者 長野市4年

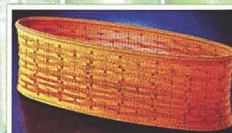
小出文生さんは、せんさいな作品を作りだしています。「道具は使うけれど、機械は使わない。自分の手の中で最後まで作るのが竹芸だ」と話してくれました。材料は売っていません。作品にあった竹ひごを作り、作品にあったあみ方を選んでいくのです。できた作品を見て、私はあたたかい気持ちになりました。



小出九六生さん

### 音琴光里記者 松本市2年

文生さんのしごとは「竹ひご」をつかって竹のさくひんをつくることです。まず、竹を半分にわってめを入れていきます。つぎに、こまかいひごをつくるさぎょうをします。なたで、はばとあつみをとってほそくしたものを、はばとり、めんとりをしてしあげます。時間をかけてつくったひごで1か月もかけてかごをつくるのもすごいし、何百年も竹がめ色にかわってのこのかなーと考えると、もっとすごいと思いました。いつもさくひんを作っているとと思ったら、文生さんは1週間にいちど、どうぶつえんのレッサーパンダに竹のはをとどけに行くとおどろきました。



### 平子友貴記者 長野市5年

小出竹材店の作業場には、まだ切っていない長い竹や、切った後の切れはしがありました。運動会の犬玉くらの犬ぎさの竹で作った玉もありました。こんなに犬ぎさのものは見たことがないので、とてもおどろきました。取材して、いろいろなものをつつ心こめて作る職人さんたちはすごいと思ったし、みんなにもっと竹について知ってほしいと思いました。

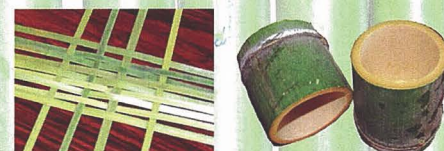


### 一柳家記者 長野市3年

昔は、竹は、生活の中でたくさん使われていた。つり道具、ザル、すだれ、水とう、ウナギをつかまえる道具などです。エジソン発明の、電球のフィラメントも竹で作られていてびっくりしました。

### 酒井裕谷記者 長野市5年

一番楽しかったのは、竹を切ってコップを作った時です。初めてノコギリを持ちましたが、切る時に力が入ってなめになってしまい、とても難しかったです。やすりで切り口を削ると、つるつるで気持ちよかったです。細い竹ひごを使って、四ツ自編みも体験しました。竹が折れそうで怖かったので、ドキドキしながら丁寧に作業しました。家に帰って、接着剤で隙をとめてコースターにしました。私の初めての竹作品でうれしかったです。



### 音琴茶依記者 松本市6年

小出九六生さんは、竹工歴60年です。九六生さんが竹の仕事が続けられた理由、それは、竹がみんなの心をひきつけてくれるからなのだそうです。日本文化の原点ともいえる竹をいかに活かすかいつも考え、努力しました。「竹は無限」—これは、九六生さんが書いた本の題名です。この言葉を聞いて、九六生さんの竹に対する深いおもいが伝わり、すてきだな、と思いました。

### 井上広章記者 長野市5年

「九六生」という名前は、昭和9年6月に生まれたので、つけられたそうです。九六生さんのお父さんも竹細工職人でした。だから、遊び道具はお父さんが作ってくれました。ほくは、ゲームとか、買ったおもちゃで遊びます。ほくも、竹で作った遊び道具で遊んでみたいです。

### 宮脇瑞季記者 長野市4年

九六生さんは、「昔は様々なものに竹を使っていたのが、だんだんプラスチック製品などに変わった」と言っていました。取材をしてみて、竹のみ力や信州のみ力をあらためて感じました。きれいな竹林を誇り、竹を活用できる場所は竹にしていけたらいいと思いました。

### 八代昌樹記者 長野市5年

ほくが一番印象に残っているのは、小出九六生さんが作った、犬玉送りの犬玉の第1号目がほくの通っている様ノ井東小学校にあるという話を聞いたことです。でも、今運動会の練習で使っている犬玉はビニール製です。倉庫に保管してあるあの赤白二つの犬玉が、九六生さんの作品なのだろうか。竹でできている犬玉を使って、犬玉送りをやってみたいと思いました。

### 矢口駿太郎記者 松本市5年

ほくが心に残ったのは、「きくわり」という道具を使って、竹をわる作業です。ハンドルのような形で、竹をわるには相当な力が必要だと思います。道具を竹に当てて、思いっきり打ち付けるのは、とてもいいんそうに思えたからです。きくわりを使って、「しゅん」で竹がわらわらわらわらって、とてもおどろきました。ほくも大きくなったらやってみたいです。